

はがきサイズの原稿用紙に新聞スタイルで原稿を書く「はがき新聞」を使って、児童が地域の特産品や歴史などを学ぶ取り組みが県内で広がりをみせている。新聞には特産品のアピールポイントや見どころなどが限られる文字数で分かりやすく説明されている。国語力や郷土愛を育むツールになっている。

勝山市荒土小では、書く力の向上につながる授業や学校行事のまとめなどに使ってきた。今秋からは地元朝

市などに訪れる来場者に特産品をPRしようと活用している。西ヶ原特産のニンニクを使ったにんにく味噌の商品をテーマにした「はがき新聞」は、6年生のうち6人が1人1枚ずつ作成した。地元の伝統野菜「妙金ナス」を焼きナスと一緒に食べるとマッチすることや、おでんに合うなど特徴を書き込んだ。

子どもたちは実際に学校で試食したとあって「はがき新聞はおいしい!」と喜ぶ声も聞かれた。今秋からは地元朝

「はがき新聞」で地域学習

県内取り組み広がる 郷土愛育むツールに



特産品のことをはがき新聞にまとめた荒土小の6年生
＝勝山市の同校

になる」などと実感のこもった感想を見出しにしている。6年生の須見日向葵さんは「新聞作りを通して地元の良さを知ると誇らしい気持ちに児童が直接手渡していると

荒土を知ってほしいと話す。はがき新聞は、公益財団法人「理想教育財団」(東京)が教育支援の一環で10年前から全国の学校に専用の用紙を無償提供している。県内ではこれまで小中合わせて9校が同財団のホームページ(HP)から申し込んでいる。はがきサイズの大きさが負担が少なく、子どもたちが取り組みやすいのが特徴。読む人を意識してコンパクトに文章を書くため、まとめる力がつくという。絵を入れたり、色鉛筆を使ったりしてカラフルに仕上げている。

全校で取り組む荒土小では出来上がった子どもたちの作品を廊下に張り出している。道関直哉校長は「教諭、児童のみなが読むことで、子どもたちが間違えて覚えやすい語句に気が付く。教諭らは注意して教えることができる」とメリットを話している。

(藪内弘昌)